

令和 6 年 6 月 23 日現在

機関番号：32828

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12900

研究課題名（和文）インドネシアを中心とする東南アジアの美術家集団にみる現代美術の社会的役割の考察

研究課題名（英文）A Study of the Social Role of Contemporary Art as Cases of Artists Groups in Indonesia and Other Southeast Asian Countries

研究代表者

廣田 緑（HIROTA, MIDORI）

国際ファッション専門職大学・国際ファッション学部・准教授

研究者番号：30796298

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究はインドネシアを中心とした東南アジア諸国の具体的な事例から、現代美術の実践がどのように社会的な役割を果たしているのか／えないのかを明らかにするものである。第二次世界大戦後、米国で誕生したcontemporary artは、1970年代インドネシアの美術家らに受容され「民衆の代弁者」という役割のもと、政治批判のできる美術として発展した。

2010年頃から美術家に限らず音楽家、演劇関係者、人類学者など学際的につながった集団が多く登場し、現代美術領域で協働を軸に置いた実践が民衆を取り込んで行われている。本研究はこうした集団の協働的实践に注目し、その役割を参与観察して考察するものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は東南アジア諸国における現代美術家集団の実践が、どのように社会的役割を果たしているのかを明らかにすることが目的である。対象とする美術家集団は昨今「コレクティブ」と称され、現代美術の領域だけではなく、より人々の日常生活に密接に繋がった空間の中で、社会的問題に向かい合った実践を行っている。

こうした集団は現在、グローバルサウスの国々を含めた世界各国で結成され、ネットワークを広げている。このように比較的新しい動向である美術家集団（コレクティブ）を研究の対象とした研究はまだ少なく、彼ら/彼女らの社会にコミットした実践からは、学術的に新たな知見をもたらすものとして意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify how contemporary art practice can / cannot play a social role, based on specific examples from Southeast Asian countries, particularly Indonesia. Contemporary art, which was born in the United States after WWII, was accepted by Indonesian artists in the 1970s and developed as an art form that could criticize politics, playing the role of "spokesperson for the people." Since around 2010, many interdisciplinary collectives have appeared, including not only artists but also musicians, theater actors, and anthropologists, and collaboration-centered practices are being carried out in the field of contemporary art that involve the public. This study focuses on the collaborative practices of these collectives and examines their role through participant observation.

研究分野：現代美術実践

キーワード：インドネシア現代美術 コレクティブ 協働 ネットワーク 東南アジア 共生 コラボレーション

## 1．研究開始当初の背景

戦後のコンセプチュアルな作品を生み出した潮流以降、近代美術の次の流れとして現代美術が生まれ、「現代」を表象する新たな美術 contemporary art も現在ではおよそ 80 年の歴史と共に多様な表現、活動形態を発信してきた。欧米中心と思われた現代美術が、1970 年代以降、東南アジア諸国へも流れ、享受されると、各国で独自の展開を見せる。

そのような中、欧米の現代美術に閉塞感が生まれ、新たな発想源をグローバルサウスの現代美術実践に求める動きが見られるようになる。そして現代美術の実践者は個人ではなく、コレクティブと称する集団として、周辺の人々との協働をもとにした社会的な美術実践を積極的に展開し始めた。

本研究は 2000 年以降のこのような現代美術領域における実践の変化に注目し、インドネシアを中心とした東南アジア諸国の事例を集め、それらが社会的役割をどのように果たしているのかという問いが生じたことが背景にある。

## 2．研究の目的

本研究の目的は、インドネシアを中心とした東南アジア諸国の具体的な事例から、現代美術の実践がどのように社会的な役割を果たしているのか／えないのかを明らかにすることである。第二次世界大戦後、アメリカで誕生した contemporary art は、1970 年代になってインドネシアの美術家らに受容され、「民衆の代弁者」という役割のもと、政治批判のできる美術として発展した。

2010 年頃からは、美術家に限らず音楽家、演劇関係者、人類学者など学際的につながったノンジャンルの集団が多く登場し、現代美術領域で協働を軸に置いた実践が民衆を取り込んで行われている。本研究はこうした集団の協働的实践に注目し、その役割を参与観察して考察するものである。

## 3．研究の方法

本研究では東南アジア諸国での現地調査が重要だったが、課題採択後すぐに蔓延した新型コロナウイルスの大きな影響により、文献調査に切り替えての対応をした。申請時に予定していた参与観察の代替手法として、調査対象とする芸術家集団や芸術家の活動を、彼らの発信する SNS から確認をし、そのデータの積み重ねから、現代美術の実践がコロナ禍においてどのように行われているのかを考察した。新型コロナウイルスによって芸術家が社会的困難にどのように関わっているのかという事例を抽出できたことは利点だと考えられる。

東南アジア諸国での現地調査は文献調査とインターネット調査に代替したが、2022 年にドイツ・カッセルで開催された大型国際美術展「ドクメンタ 15」の調査は実現したため、参加した美術家集団の実践、聞き取りを行うことが可能となった。

#### 4．研究成果

本研究におけるもっとも大きな成果は、インドネシアのアート・コレクティヴの現況を詳述した単著『協働と共生のネットワーク インドネシア現代美術の民族誌』（GRAMBOOKS）を出版できたことである。本著は代表者の修士論文「スニ・コンテンポレル - インドネシア現代美術における『市場』と『言説』の変容」（南山大学大学院、2013 年）、博士論文「インドネシア現代美術と美術家：つくる・買う・支援する主体をめぐる民族誌」（名古屋大学大学院、2016 年）に加え、本助成を受けて行った追調査により、博論執筆以降のジャカルタ、ジョグジャカルタ、バリにおけるコレクティヴの活動についても記述することができた。とくに 2022 年 6～9 月、ドイツのカッセルで開催された国際美術展「ドクメンタ 15」で芸術監督となったインドネシアのコレクティヴ ルアンルパ(ruangrupa) の設立から監督就任までを参与観察で得た情報と考察により深く記述したことにより、国内の美術関係者には大きな貢献ができたと考えている。

二つめの成果は、研究期間終了間際となる 2024 年 2 月に、代表者本人が実践者となり、インドネシアの版画コレクティヴと共に名古屋市内で市民に深く繋がった現代美術のプロジェクトを行ったことが挙げられる。「飯田街道聞き取りプロジェクト」の名で 1 ヶ月行った実践の内容は以下のとおりである。

1．代表者、インドネシアの版画コレクティヴ グラフィス・フル・ハラ(Grafis Huru Hara)の選抜メンバー 4 名、現山口情報芸術センターのインドネシア人キュレーター、レオナル・バルトロメウス(Leonard Bartolomeus)の 6 名による「コレクティヴ」が名古屋、新栄を拠点として市民と協働して作品を完成させるまでの一連の実践を行う。

2．2 名の語り部、一般から募った参加者 10 名と街道散策ツアーを行い、この場に昔あった記憶を共有し合う。そこから制作のアイデアを探し、市民との協働作品へと繋げる。

3．1 週間のオープンスタジオで、代表者、 グラフィス・フル・ハラ による制作の様子を一般公開する。その間は来場者とのコミュニケーションを重視し、拠点周辺の記憶などを聞き取り、制作にも参加するよう促す。

4．拠点周辺の店舗に出向き、作品展示の協力を求める。

5．2 日間のワークショップを開催し、一般参加者とともに複数の版画技術を使って共同作品を制作する。

これらの実践を代表者自ら「コレクティヴ」の一員として行うことにより、現代美術家が社会と繋がり、アートを介して教育的役割を担える可能性があることを具体的に経験できたことは大きな収穫である。科研費による研究期間は終了したが、この実践で得た知見、ネットワークを生かし、今後のより深い研究へと発展させていきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 廣田 緑	4. 巻 -
2. 論文標題 ドクメンタ15におけるルアンルパの挑戦：《ルル学校》の実践で生まれたフォーマット	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Tokyo Art Beat	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 廣田 緑	4. 巻 884
2. 論文標題 インドネシア現代美術への招待第1回インドネシア現代美術「スニ・コンテンボレル」の躍動	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Monthly Indonesia	6. 最初と最後の頁 32-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣田 緑	4. 巻 885
2. 論文標題 インドネシア現代美術への招待第2回：人口1056万のメトロポリス、ジャカルタのアートシーン	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Monthly Indonesia	6. 最初と最後の頁 32-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣田 緑	4. 巻 886
2. 論文標題 インドネシア現代美術への招待第3回：ジャワのバリ、バンドゥンのアートシーン	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Monthly Indonesia	6. 最初と最後の頁 21-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中尾世治・廣田緑	4. 巻 1
2. 論文標題 「作品（アート） 研究（人類学）」：トランスフェリムスの実践、あるいは《トライアル0004》	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 FAB	6. 最初と最後の頁 144-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣田緑	4. 巻 20201101
2. 論文標題 【インドネシア】赤道から世界へ 現代美術の主要エリアから	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アートスケープ（美術館・アート情報のWebマガジン）	6. 最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中尾世治・廣田緑	4. 巻 37
2. 論文標題 アートと人類学の対称性へ 《trial 003: as if archaeologists》の意味の遡及的探求	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 民族藝術学会誌arts/	6. 最初と最後の頁 115-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣田緑	4. 巻 4
2. 論文標題 持続可能なアート・コレクティブの実践 《ルル学校》と「ドクメンタ15」から考える	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 FAB	6. 最初と最後の頁 213-227
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件）

1．発表者名 廣田緑
2．発表標題 アーティスト・コレクティブの協働実践～GUDSKULの事例から～
3．学会等名 中部人類学談話会第262回例会
4．発表年 2022年

1．発表者名 廣田緑
2．発表標題 コレクティブと考える パンデミック以降の地域文化活動の可能性
3．学会等名 九州芸文館オンライン・トークイベント（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 中尾世治・廣田緑
2．発表標題 アートと人類学：往還の先に見える可能性
3．学会等名 第36回民族藝術学会大会
4．発表年 2020年

1．発表者名 廣田緑
2．発表標題 インドネシアにおける新しいアーティスト・コレクティブの展開
3．学会等名 同時代のアートと人類学研究会（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 廣田緑
2．発表標題 協働と共生のネットワークからみるインドネシア現代美術のいま
3．学会等名 インドネシア国立芸術院ジョグジャカルタ校美術学部（招待講演）
4．発表年 2024年

1．発表者名 廣田緑
2．発表標題 協働と共生のアート　インドネシアのコレクティブからみる現代美術の現在地
3．学会等名 国際交流基金東京本部勉強会（招待講演）
4．発表年 2024年

〔図書〕　計2件

1．著者名 廣田緑	4．発行年 2022年
2．出版社 グラムブックス	5．総ページ数 496
3．書名 協働と共生のネットワーク：インドネシア現代美術の民族誌	

1．著者名 木俣元一、佐々木重洋、水野千依、大村敬一、中尾世治、奥健夫、栗田秀法、廣田緑、松崎照明、古谷嘉章、松井裕美、橋本茉莉、須網美由紀、出口顯、秋山聡、杉山奈生子、芳賀京子、杉山美耶子、森雅秀、奈良澤由美、樋口諒	4．発行年 2022年
2．出版社 三元社	5．総ページ数 680
3．書名 聖性の物質性	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------